

次世代と一緒に災害復興に立ち向かいたい！

～阪神・淡路大震災23年・東日本大震災7年・熊本地震2年の経験から～

認定NPO法人 まち・コミュニケーション

代表理事 宮定章

(神戸学院大学 非常勤講師 災害復興研究論担当)



1. はじめに

日本災害復興学会神戸大会公開シンポジウム「次世代に災害教訓を継承する」で、諸先輩方と共にパネラー発表の機会を頂き感謝いたします。本稿では、発表内容の報告を行います。

2. 阪神・淡路大震災が自身のキャリア形成に与えた影響と研究や実践等の軌跡～僕が現場に拘るわけ～

(1) 安藤忠雄にあこがれて建築学科へ

阪神・淡路大震災の直後は、浪人生で、申し訳ないことに、自分の受験勉強で必死でした。自宅の被害はありませんでしたが、西宮市や周辺は大混乱だったので、大阪の親戚宅で世話になり、受験勉強をつづけました。そして建築学科に合格しました。

建築学科を選んだ理由は、当時から脚光を浴びていた建築家の安藤忠雄さんや、東京のお台場など、近代的な建物にあこがれていたからです。しかし、それらはデートスポットのため実際学ぶためには、一人でのアプローチは難しく、彼女が必要になったのです。スキーに明け暮れていた私は、彼女のできないまま(昔のご婦人にはモテます)、大学生活はあっという間に終わり、大学院へ進学しました。大学入学時にあこがれていた近代建築への興味はいつの間にか薄れ、スキーサークルで様々な企画をしてきたからか、建築物を建てる前のプロセスに興味を持ち始めました。建物を建てる人の思いが、どのように反映されていくのかを研究したいと思ったのです。その研究をするには「まちづくり」に近いと思い、大学院1年生にやっと大学の研究室で書籍等を読み始めました。書籍ではわから

ないことが多く、現地の人の声を聴きたいと思いました。ただ、どうすればいいかがわからず、しばらく悩んでいました。

(2) まちづくりプランナー 宮西悠司氏との出会い

そんな時に大学の研究室で、神戸市長田区の真野地区を訪問する機会を得て、真野地区で長年まちづくりに関わっているプランナーの宮西悠司先生にお会いしました。宮西先生は、路地(道路)ですれ違った地域の方のお話に耳を傾け、優しくそんなお顔で相談のっておられました。「こうすれば現地の方の話が聞ける!」と思いました。今でも僕はまちづくりに関わる中で、地域の方の想いを聞き出すことを大事にしています。

真野地区を訪問後、再度、緊張しながら宮西先生に電話をし、再会をさせていただきました。今度は、大阪から始まり、三ノ宮、長田と、夜通し飲み続け、真野地区のコンテナ事務所に宿泊しました。そして朝は、長田名物の喫茶店でのモーニングを食べ、最終的に、真野地区から北へ徒歩15分のエリアにある御蔵(みくら)地区に来ました。

阪神・淡路大震災で、8割が焼失する被害を受けた神戸市長田区御蔵地区の「一人でも多くの人を元のまちに戻そう」という目標に、住民の生活再建をつぶさに見、住民の意思からの復興が必要だと思い、素人ながら、復興まちづくりを支援する団体「まち・コミュニケーション」(1996年設立、以下まち・コミ)が、支援活動をしていました。

(3) 震災から5年を経た被災地神戸の現場にて

こうやって、まち・コミが活動している御蔵地区に来た私は、右も左もわからない状態でしたが、学生が

ランティアとして活動に参加し、スタッフのみなさんや地域住民の方にいろんなことを教えていただきました。

当時は、まち・コミがコーディネートをした共同再建住宅「みくら5（ファイブ）」が完成した直後でした。まちづくりの本はたくさん読んでいましたが、本当に、住民が、率先して、住宅再建（建設工事含む）や、地域のスペースをつくることのあるのだと興奮したのを覚えています。みくら5の1階では、人々が集うコミュニティスペースをつくろうと、地元の方を中心に準備されている姿に圧倒され感動しました。皆さんお忙しい中でしたが、私を温かく迎えてくださったことを今でも鮮明に覚えています。簡単な言葉しか浮かびませんが、書籍で書かれた理想と現場とのギャップを感じられ、本当にうれしかった。そして、御蔵地区を歩いてみると、震災から5年も経っているのに、建物が少なく、空き地が多い状況で驚きました。「これが復興なのか？」という疑問が消えませんでした。

私が御蔵地区に通い続けることになった理由は、なぜ人がいない復興になったのかを理解したいし、まだ今からでも改善できるんじゃないか？という思いがあるから。そして、共同再建住宅「みくら5」は、企画段階からまちづくり協議会とボランティアが話し合い、居住者を募って建てたというプロセスにあこがれたからです。

（４）復興まち支援組織のリーダーに

当時、ボランティア団体（まち・コミ）の代表をしていた小野幸一郎さんは、震災直後に関東から支援に駆け付け、「御蔵地区の復興のためには、地域に人が戻ってくることが大切」という信念のもと、団体を設立し、牽引してきた人です。小野さんは、日常生活を続ける上で大切なことならば、たとえ見過ごしそうなほど小さなことであっても、課題として取り組んでいました。見て見ぬふりができないということが、まち・コミの良さだと感じました。

小野さんが関東に戻ることになり、後継者が求められたとき、「（地域づくりを現場でコーディネートす

る）この活動を続けなければ！」という責任感が僕の中に湧いてきました。そして僕が、2002年4月に、代表を引き継ぐことになりました。

その後、御蔵通五・六・七丁目の自治会館の建設のコーディネートを行いました。地域住民と建築を学ぶ学生を中心に延べ5000人のボランティアが工事に関わって、日本海側の香住町にあった古民家を移築して自治会館を完成させました。建築学科に所属して、「建物を使う人の思いが、どのように反映されていくのかを研究したい」と思っていた私は、それまで、ソフトのお話ばかりだったので、建築物に関わったことで、心が落ち着きました。日本と台湾の学生達も関わったため、もう一棟を台湾へ移築しました。

（５）現場に常駐するための環境づくりの難しさ

当時は、NPO法はできたものの、小さなボランティア団体が食べていくほど事業収入をあげることは、難しく、就職とは言いにくいものがありました。そこで、都市再生機構（現在UR）で働きました。団地の建て替え事業部で、計画づくり（戸数、予算）をしました。団地の建て替え（トータルリニューアル課）事業のURの方々には、事業のシステム等、多くのことを教えて頂きました。が、大きな組織の計画づくり担当は、一人ひとりの生活から、どうしても遠いと感じてしまい2年弱で辞めて、長田の現場に戻りました。

神戸では、ボランティアと住民が地域づくりを行う活動が珍しく、震災8年目にして、まちづくり協議会と連名で、防災功労者内閣総理大臣賞（2003年）を受賞しました。被災者やまちに寄り添い生活再建を支えるという具体的に成果が見えにくくわかりにくい活動が認められたことは、多くの方々に支えられてきたので、ほっとしました。

阪神・淡路大震災から10年を経た頃、復興事業での基盤整備も終盤をむかえ、まちの活性化に向けて活動しようとした矢先、地域住民の中で、もうまちづくり協議会は解散して、自治会で良いのではないかと意見が出始めました。そして、2006年12月に解散の決議がされました。

焼け跡になったまちで、「もう一度、わたしたちのまちを再建しよう!」と、住民有志が集い、住民自ら呼びかけまちづくりを話し合う組織をつくりました。そして、区画整理事業の計画づくりへの住民参加にむけて、行政からも要請があったまちづくり協議会は、震災から10年の間に、仕事後の夜の貴重な時間を利用し、500回を超える会議を行ってきました。それが、10年間の経緯もよくわからないまま、解散を申し入れられました。「なぜ、こんなことになったのか?」大学院出の未熟な私には、理解ができませんでした。そこには、震災で仕事を失い、奥さんがパートを3つも掛け持ちでして、会議に出たくても、時間がなく出られない方や、声を出したくても、復興事業のあまりの環境変化とその早さに、声をあげることができない方がいたのです。私は、活動をする中で、地域住民の声が、気になっていましたが、住民参加の事業も、年度毎の計画で、進めなければならず、ジレンマに陥りましたが、進めてきました。そこで、地元住民と地元住民の意思疎通ができない状況が、なぜ起こったのかを探求し、解決したいと思いました。しかし、活動を続けていると、何とかしたいという想いと行動だけでは解決できないことも多く、専門性を持った支援活動が必要だと実感しました。そこで、これまでの生活再建の過程と地域の復興との関係を論考するため、2006年に神戸大学博士課程に入学しました。まちづくり活動をつづけながら6年がかりで修了。工学博士になりました。論文のテーマは、『復興土地区画整理事業における権利関係・建物用途に着目した再建動向に関する研究—神戸市御菅西地区におけるケーススタディー』『都市型災害時における従前居住者用賃貸住宅の入居プロセスに関する研究—阪神・淡路大震災復興土地区画整理事業地区(神戸市)の事例を通じて—』としてまとめました。震災後のアンケート調査で、8割の方が元いた地区に戻りたいと希望しながら、地域に戻ってこられない過程と要因を明らかにしました。御蔵地区では、元いた住民の27.3%が戻ってきました。一度地区外へ出て、戻ってきたの

は、住宅だけで、工場・店舗に関しては、「転出先で出来た顧客を切っただけで、人の少ない元いた地区に戻る必要はない」とか、「引っ越し費用がかさむので、移転できない」等で、一切戻ってきませんでした。時間をかけて、綺麗なまちをつくっても、生活者はその時間に対応できず、戻ってこられないことが明らかになりました。

だからこそ、次なる災害では、安全を確保しながら現地で仮再建し、そこで、まちづくりを話し合いながら生活再建や復興活動をすることで、住民参加を確保することが、数年後の地域にとっては、良いのではないかと考えています。

(5) 東日本大震災の被災地へ

博士論文を提出し、送別会が終わった日(2012年2月)に宮城県石巻市雄勝町に向かった。博士論文提出前に、雄勝町の若者が、「このままではまちが無くなる」と、神戸まで訪ねてこられました。論文で明らかになったことが、今、雄勝町で起こっていました。「すぐ行くべき」と考え、車上生活になるため、生活道具を車に詰め、雄勝町に向かいました。やむなく転出した方も多く、話し合いをしたくても、集まりにくい状況になってしまいました。また、復興事業の選択肢が、高台移転(防災集団移転促進事業)のみになりつつあり、現地再建をしたくても、事業の枠に漏れる者もあり、格差や利害関係が生じ、話し合いの前の、被災当事者地域の皆との正確で納得のいく条件整理が難しく、会合では、言い争いになる可能性が高く、会合を持ちにくい状況でありました。

土地を扱う復興事業に時間がかかるため、元の地区に戻りたいと希望していた人も、時間に耐えられなくなり徐々に少なくなりつつある。

震災前、地区の居住地の大半を占めていた浸水域は災害危険区域であり土地利用に制限がかかり、地域として震災前のように、居住地がとれないため、人がいないまちでどのように復興できるのか、地元住民の中には、まちの将来像を見いだせない者もいた。

そこで、復興事業の進捗を追い、地域の方と共有す

ることはもちろんのこと、復興事業メニューだけではフォローできない地域住民のまちづくりビジョンを考える場をつくるため、東日本大震災から6年間は、現在、20日/月常駐し、漁師や農家と共に汗を流し、現地の被災者が何を考えているのかを実感し、復興支援に結びつけようと活動を行いました。

(6) 復興まちづくりにもう一つ必要なこと～内発的まちづくりに向けて一事実の聴き取りから、立ち位置を確認して動く～

漁村を周りながら、明治から現代までの個人史や地域史を聴き、住民と共に成功体験を振り返っています。人は、自分の生活経験から出てくることを表現するのは大好きで、それが行動になる。「人はルーツを知り、立ち位置を確認せずに安心して歩み出せるだろうか」。聴き取りにより、表現の場をつくるようにしています。そこから、身の丈にあったまちづくりが始まることを願っている。

最近の一つの例をあげると、津波で家が流され親族の家に身を寄せる森の管理をしてきた一人の紳士と、地元住民会議で出会い、会議の数日後、まち・コミは、彼の元を訪れ4日間連続して、聴き取りを続けました。

その内容は、前回の会議の振り返りと共に、前回の会議で、誰もわからなかった事項を調べて来、関連情報について、お話ししました。そうすると、彼からこれまでの生活再建・まちづくりの話をしてくださり、その後、彼自身の生活再建の経緯と時々の想いを共に振り返りました。その途中から、彼は、興味のあることの数々を話し始めました。森林をずっと整備してきたそうで、森林組合など、当事者が持っている資料を見せて下さりました。それを借り、次の日には、森林の再生に向けた経緯を視点に、まち・コミで、その資料をまとめ直して、関連参考書籍と共に持って行きました。

その数日後も、聞き続けると、徐々に、彼から想い出が出てきた。「昭和8年の津波の時は、電気工事の人が、残った我が家に泊まり込み、復旧・復興活動をしたのを覚えている。俺も、住む場と共に、復旧・復

興の基地になる場をつくりたい」と、過去の地域へ貢献した話を思い出しながら、張りのある声で話して下さいました。次の日、神戸での活動のひとつであるまち・コミがコーディネートして、住民とボランティアが建てた古民家移築集会所の写真集を彼に見せると、自分でもできると思ったのか、その翌日から、休み無く山に入りました。2日後には、チェーンソーを借りに行きました。切った木を運搬するのが大変で、5日後にはロープをどこからか手に入れた。まち・コミもその様子を発信すると、そこに仲間が集ってきた。ボランティアも共に、木を切り、山から降ろしている。彼もチェーンソーの免許等を取りに行き、作業小屋を建てる材料の準備の段取りはなんとか整ってきた。「設計できるものはおらんか。昔は、大工の元で、地域の人が建設工事をしていたのだから(自分達でも建設できるはず)」と、嬉しそうに話し、自ら家を建てるため動き始めた。

2. 今後の災害を念頭に、次代を担う中核として減災復興にどう貢献していくのか

『災害が頻発している。地震だけではなく、水害等が多い』災害からの復旧・復興が大事だと言われます。ただ、今の復興は、元の近代社会に戻すイメージが強くそれで良いのかと思います。自分の生活を見直すことが大事だと、先日、講演して頂いた佐々木俊三氏(東北学院大学名誉教授)も、『復興とは何か?』に対して、『復興とは、システム社会(近代化・化石燃料社会)の復活を意味したのです。』とおっしゃっています。

3. さらに若い世代に望むこと(人材育成の観点から)

復興の研究者も(被災者の生活に影響する学問だからこそ)、『自分のしたい生活とは何か?』を、自身で考える生活感覚を持つことが大事だと思います。そして、自分の住んでいる地域で、自分の生活がどう関係しているかを知っておき、災害前から、愛着を持っておくことが、災害後の復興の指針として重要だと思っ

ています。だからこそ、生活を重視した事前復興が必要です。既存の復興の枠組みを学んだ上で、災害現場へ若い間に、できるだけ行きましょう。その生の現場からの、既存の枠にとられない新しい発想が必要だと思います。インドネシアのメラピ山噴火災害からの再建に取り組む地元の方から学びました。『火山とは、トモダチなんだ』日本でも、地域住民と共に考えること、共に、海外の事例から学ぶことが大事だと思います。共に頑張りましょう。若い世代の皆さんと、災害現場での生活再建支援に向けて、ご一緒できるのを楽しみにしています！